

RILAS 研究部門「イメージ文化史」主催講演会 報告書

2017.10.24

ロドルフ・テプフェールからウィンザー・マッケイへ  
——ストーリーマンガの誕生

**De Rodolphe Töpffer à Winsor McCay, naissances de la bande dessinée**

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」

共催：文学部フランス語フランス文学コース

日時：2017年10月24日（火）17:00-19:00

場所：早稲田大学戸山キャンパス 33号館第1会議室

講演者：ブノワ・ペータース氏（作家・BD原作者・評論家）

通訳・解説：森田直子氏（東北大学准教授）

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」では、作家、BD原作者、評論家と幅広く活躍されているブノワ・ペータース氏をお迎えし、「ロドルフ・テプフェールからウィンザー・マッケイへ——ストーリーマンガの誕生」という題目でご講演いただいた。19世紀半ばから20世紀はじめにかけて、ヨーロッパおよびアメリカでストーリーマンガがいかに成立したのかを、多くのイラストとともに解き明かす講演会であり、50名近い聴衆が次々に映し出されるイラストに魅せられながら熱心に耳を傾けていた。

はじめに、ペータース氏は、スイスのジュネーヴに生まれ、現在ではストーリーマンガの発明者という評価の定着したロドルフ・テプフェール（1799-1846）について、その生い立ち、ストーリーマンガを作るようになる経緯、ゲーテによる賞賛などを紹介された。つづいて具体的なイラストを様々に参照しながら、ストーリーと合わせて、その中に見えるからかいや皮肉、テプフェールの生み出した技巧などを詳細に分析された。テプフェールは、転写石版の技法によって版を反転させなくても印刷を可能にするなど、革新的な発明とともに活動に励み、晩年にいたっても、出来事を記号化しようとする、新しい表現手法を生み出していった。テプフェールの影響を受けてストーリーマンガを書いた作り手も少なくなく、それらの作品についても言及された。

続いて19世紀末から20世紀初頭のアメリカに話題を移し、かつてストーリーマンガ

の起源とされることの多かったアウトコールの *Yellow Kid* が論じられた。この作品での色彩の使い方の意味、また吹き出しを利用しているという点において重要であることに言及したのち、同じ時代にストーリーマンガ作家として活躍したウィンザー・マッケイ (1871-1934) について取り上げられた。特に代表作の一つであり、登場人物の夢を舞台に描いた『リトル・ニモ』については、ページの構成、自由な色彩といった描き方の工夫を重点的に紹介された。

講演後、森田氏からいつからマンガが子供向けになっていったかということについて質問があった。それに対して、ペータース氏は、商業的に家族向けの出版があったこと、またストーリーマンガの強みとして、視覚言語がいろんな世代に通用するということがあり、それが重要であると述べた。最後に会場からの質疑応答を経て、盛況のうちに閉幕した。

(記録：常田槇子)

